リレーエッセイ

One for all, All for one

皆さんは，“One for all, All for one”というフレーズを聞いたことないでしょうか？　2019年のワールカップラグビー前後で，各メディアがこのフレーズを頻繁に取り上げていたので，どこかで耳にしたことがあるのではと思います．自分は，かなり昔からこのフレーズを，やはりラグビーをプレーしていた人から聞きました．このフレーズの意味は，「1人はみんなのために，みんなは1つの目的のために」です．これは，ラグビーに限らず団体球技全般に当てはまると思います．どの競技も得点シーンが特に注目され，その得点を取るエースプレーヤー達は，メディアの注目の的になります．昨年のW杯サッカーでも，メッシやエムバペ，日本代表では堂安選手達が脚光を浴びたのは，記憶に新しいと思います．しかし実際のゲームでは，そのようなエースプレーヤーだけで得点が取れるのはまれで，多くの場合は得点に繋（つな）がる前のプレーや，ボールを持っていない選手のプレーが大事だったりします．自分も，大学の時から体育会ハンドボール部に所属し，卒業後も社会人のクラブチームで長年ハンドボールをしていました（ちなみに，筆者らのクラブチームは近畿大会で優勝したことや，西日本クラブ選手権にも出場したことがあります）．自分のポジションは，ピボット（あるいはポスト）と呼ばれるポジションで，相手ディフェンスの中に入って，ディフェンスの邪魔をして味方の選手がシュートを打ちやすい状況を作る役目でした．自分自身がシュートを打って得点を挙げることもありますが，どちらかというと裏方の役割です．しかしチームを勝利に導くには，裏方の働きが重要になってくるので，非常に楽しいポジションでした．

“One for all, All for one”は，研究にも当てはまると思います．2007年にオーストラリアのモナッシュ大学のProf. Alan M. Bondの研究室において，客員研究員として半年間研究する機会がありました．研究を進めていく中で，彼の研究室にはない分析機器を使った測定が必要となった場合，次のミーティング時には，その測定の専門家である研究者（学内外関係なく）が参加して，研究が進められていくということが普通に行われていました．彼は，電気化学の分野では世界的に非常に著名な先生です．そのような先生ですので，研究室には多種多様な分析機器が充実しているのだろうと，渡航前には予想していました．しかし，実際の研究室は必要最低限の機器，器具および試薬しかなく，その時に必要になれば近くの研究室から借りればいいというスタンスでした．今でこそ異分野交流，大型機器の共同利用や産学官の共同研究が，一般的になってきています．しかし，その当時は，一研究室内で研究を完結するのが普通と思っていた自分にとっては，自分の研究スタイルを見直すいいきっかけになりました．特に地方大学では，設備面では色々と苦労することも多かっただけでなく，教員の数も限られているので，自分の研究を行う上で助けていただける先生も近くにいない状態でした．そういった状況を少しでも改善しようと，オーストラリアから帰国した後は，あちこちの共同利用施設を利用したり，一緒に研究をやっていただけそうな先生を積極的に探して，共同研究を推進することにしました．そうすることによって，自分の研究が深化したとともに，様々な分野へ幅広く展開できるようになったと思います．この研究スタイルこそ，“One for all, All for one”ではないかと思っています．特に近年では，研究分野の拡大とともに，細分化されていて，一人の研究者だけでは手に負えない部分が増えてきています．限られた時間と予算を考えると，一研究室内のメンバーだけでやり遂げるよりも，それぞれの専門家と一緒に研究を遂行した方が，研究自身のクオリティーも上がり，研究の展開も早く，自分が予想もしなかった思いがけない発見にも繋がると思います．今後も様々な分野の先生方や研究者の方々と共同研究を進めていこうと思っております．

このリレーエッセイは，理化学研究所放射光科学研究センターの瀬戸康雄さんからバトンを受けました．瀬戸さんとは，2021年の長野地区講演会において，お互い講演者としてたまたま一緒になり，2022年に岡山大学で開催された第71年会の時に，直接お話できる出来る機会がありました．非常にユニークで元気な方です．このバトンは，次に㈱リガクの高原晃里さんに渡します．彼女とは，お互い別の研究室でしたが大学の同級生で，今でも大阪に帰った時には飲みに行く友人の一人です．人のつながりも非常に興味深いですね．

〔高知大学教育研究部総合科学系　上田 忠治〕